



十二 お笑いは続くよ、どこまでも

お客さんが誰一人としていないホールの上でしゃべり続けている人がいる。その人をホールが一番奥の柱に隠れて見ている人がいた。

「どうなの？」その人に向かって背中から男が声を掛けた。舞台監督の山ちゃんだった。

「もう、私が知っているだけで、一人で二時間以上もしゃべり続けているわ」スマホで時間を確認し、あきれたように答えたのはいないよの元マネージャーの伊藤だった。

「そうか。二時間も一人でか。でも、ひきこもりから、演芸場に来て舞台上でしゃべっているんだから、一歩、前進じゃないか」山ちゃんは無理にでも笑顔を作る。

「そうね。まさか、いないよが舞台上にいるなんて思わなかった。帰ろうと思って、ふと気になってホールのドアを開いたら、舞台上で誰かがしゃべっているのよ。若手が練習しているのかと思って目を凝らして見たら、いないよじゃないの。びっくりしたわ」

「じゃあ、伊藤はいないよが来ていることは知らなかったんだ」

「もちろんよ。あんなに誘っても、演芸場の方向には一歩も前に進まないし、家で寝る時も演芸場に足を向けているらしいわ」

「それ、いないよの一流のギャグじゃないのか」

「そうかもね」伊藤は肩をすくめた。

「じゃあ、いないよはもう立ち直ったのかな」山ちゃんはいないよを少しでも近くで見ようと、一歩足を前に出した。。

「さあ、どうかしら。お笑いの練習と言うよりは、これまで溜まっていたうっぷんを晴らすかのように誰かとしゃべっているわ。それに、さっきから見ていると、ただしゃべるだけでなく、舞台上で寝転んだり立ち上がったたりしているのよ。まるでドタバタ喜劇よ」

「一体、誰と？」山ちゃん目が大きく見開く。

「人形よ。左手に人形を持っているわ」山ちゃんとは反対に目を伏せる伊藤。

「とうとう、いないよは・・・」言葉に詰まる山ちゃん。

「狂っているんじゃないわ。多分、あの人形はいたよじゃないかな」慌てて否定する伊藤。

「幻想のいたよか。その方が怖いんじゃないか」

「いいえ。人は誰でも幻想を持っているのよ。その幻想の中で生きているのよ。いいえ、幻想の中でしか生きていけないのよ。そうしないと、人格崩壊になるわ」

「それは、伊藤も俺も、全ての人が、ということか」確認するように山ちゃんが伊藤に質問する。

「そうよ。あたしはあたしの幻想。山ちゃんは山ちゃんの幻想。こうして話が通じるのは、二人の幻想が交わっているところだけ。それはほんの一部なのよ」確信を持って伊藤が言い放つ。

「それ以外は」

「自分の幻想の中で笑ったり、泣いたり、話しかけたりしているのよ」

「じゃあ、いないよは幻想の中で、何をしゃべっているんだ」

「よくわからないけれど、いたよと二人でお笑いをしているみたい」それまで引きつっていた伊

藤の顔が最後の言葉でゆるんだ。

「二人で？一人二役か。腹話術じゃあるまいし」山ちゃんは鼻で笑おうとした。

「そうかもね」大きく頷く伊藤。それは全てを許す肯定の頷きだった。

「まだ、いたよのことが忘れられないんだ」山ちゃんは目を伏せた。

「そうね。でも、無理に忘れなくてもいいのよ。無理に忘れようとするから苦しいのよ。いないよといたよは一心同体。ずっと一緒にいいのよ。いたよがいて、いないよに引き継がれるのよ」

伊藤は自分で自分に納得させるように呟いた。

「そうだな。俺たちも、いたよといないよとずっと一緒だ。その部分だけ共同幻想だ」

伊藤と山ちゃんは舞台の上で終わりなくしゃべり続けているいないよの姿を二人でじっと見つめていた。

「小話を一つ」

「よっ、大統領」

「ちょっと掛け声が古いで。もっと新しい掛け声ないんかいな」

「それなら、内閣総理大臣」

「はい。いたよ議員の質問にお答えいたします。なんで、あたしが国会議事堂におるんや」

「相変わらずノリがええなあ。いないよちゃん。はよ、小話を続けてよ」

「あたしがしゃべりたいのに、あんたが邪魔しとんのやろ。ほな、しゃべるで」

ある日、右手が左手に向かって言いました。

「いつもお箸や荷物なんか持たされるんで、疲れたわ。たまには交代してくれへんか」

左手はすぐに返事をした。

「ええで」

そこで、右手が左手に、左手が右手に変わった。すると、ぎっちょになった。

「何や。右手の役割は変わらへんのかいな」

「あたしらも一緒や。あんたが天国にいても、あんたは突っ込みで、あたしはボケや」

「そや。いたよ・いないよのお笑いは永遠に不滅や」

「ほんでも、今日のお笑いはここで終わるで」

「一時的に全滅かいな。ほな、さいなら」いたよ人形といないよは舞台の上から誰もいない観客席に向かって頭を下げた。

「冬でんなあ」

「ええ。冬でっせ」

「寒うおますなあ」

「冬やからなあ」

「答えになっとらんで」

「なってなくても、冬は事実やで」

「ほな、あたしはこたつで丸くなるから、あんたは庭を駆けずり回って」

「なんで、あたしだけ庭を駆けずり回らなあかんのや」

「ほな、一緒に冬眠しましょか」

「舞台に出てきたばかりやのに、もう冬眠でっか」

「おや」

「すみ」

「目が覚めたら」

「春やで」